



Title	主がしつらえる地域の場所に関する研究
Author(s)	田中, 康裕
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/48551
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 **たなか やすひろ**
田 中 康 裕

博士の専攻分野の名称 **博 士 (工 学)**

学 位 記 番 号 **第 2 1 2 4 1 号**

学 位 授 与 年 月 日 **平成 19 年 3 月 23 日**

学 位 授 与 の 要 件 **学位規則第 4 条第 1 項該当**

工学研究科建築工学専攻

学 位 論 文 名 **主がしつらえる地域の場所に関する研究**

論 文 審 査 委 員 (主査)

助教授 **鈴木 毅**

(副査)

教 授 **奥 俊信** 教 授 **横田 隆司** 教 授 **澤木 昌典**

教 授 **阿部 浩和** 教 授 **今井 克彦** 教 授 **大野 義照**

教 授 **甲津 功夫** 教 授 **相良 和伸**

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近年各地に開設されているコミュニティ・カフェで何が実現されているのかを、特に、その場所の維持・管理に責任をもつ人物である主(あるじ)の存在に注目して考察したものである。本論文の構成は以下の通りである。

序論では本論文の背景と目的、及び論文の構成を記した。

第 1 章では、近年様々な場面で使われている居場所という言葉に注目し、既往研究における記述を分析することで、居場所の意味と、居場所を構成するものについて考察した。また、居場所を構成するものである社会的関係については、親密な関係にある他者でも、全くの他人でもないような関係としての中間的な関係に注目し、現在社会における中間的な関係の意義を考察した。

第 2 章では、中間的な関係にある他者との接触が地域のどのような場所で生まれているのかを明らかにするために、子ども・若者にとっての異世代の顔見知りの人との接触に注目し、現役の大学生を対象とするアンケート調査を行った。調査結果を考察することで、地域の場所に主が存在することが重要であることを述べた。

これらをふまえて、第 3 章から第 5 章ではコミュニティ・カフェに関する詳細な考察を行った。特に、親と子の談話室「とぼす」、ふれあいリビング「下新庄さくら園」、「ひがしまち街角広場」という 3 つの場所を対象とし、主に対するインタビューを中心とするフィールドワークを行った。

第 3 章ではコミュニティ・カフェの運営における特徴を示し、従来の公共施設とは異なるかたちではあるが、いくつかの観点によって、コミュニティ・カフェはパブリックな場所であると見なし得ることを示した。

第 4 章では、コミュニティ・カフェで目的として掲げられている「交流」、「ふれあい」という言葉の中身が、運営を通して事後的に形成されていることを考察した。

第 5 章では、コミュニティ・カフェの主はそこで生じた出来事にその都度対応することによって家具や内装などの物理的なものや日々の実践によって場所を徐々にしつらえていることを考察した。

第 6 章では、あらかじめ親しい関係にある人同士で過ごすだけの場所でも、人々が互いに何の関わりももたずに過ごす場所でもないコミュニティ・カフェでは、1 人でそこに居ることに積極的な意義が与えられていることを考察した。

第 7 章は結論であり、以上で得られた結果をまとめて示した。これをふまえて、今後地域の場所がどうあればよいのかについて述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近年新たな地域のか場として注目されているコミュニティ・カフェを対象として、そこに実現されている場所の質と地域社会における意義、その場を維持・運営する「主（あるじ）」の役割と計画論について分析・考察を行っている。具体的には、文献調査、アンケート調査、及び3つのコミュニティ・カフェの詳細なフィールドワークを通して以下のような研究成果を上げている。

- (1) 社会の様々な場面で用いられるようになった「居場所」に関する既往文献・研究を整理して、居場所には、今のままの自分で居られる、自分の場を発揮することができる、世界を垣間見ることができる、という3つの意味があること、新しい地域のか場を考える上で、特に3つ目の意味に関連して、親密な関係でも全くの他人でもないような中間的な関係が重要であることを指摘している。
- (2) 中間的な関係として異世代の顔見知りの人との接触に注目し、大学生を対象とした調査を行い、子ども・若者にとっての異世代の顔見知りの人として、近所の人、習い事の先生、友人の家族、散髪屋など、場所を責任もって維持・管理している「主」というべき人の場合が多いこと、またその関係は別目的で場所を訪れたり通りかかることに付随して生まれる傾向があることを明らかにしている。
- (3) 各地のコミュニティ・カフェの予備調査を踏まえて、早い時期に開設され運営が中断することなく継続され地域の重要な場となっている、親と子の談話室「とぼす」、ふれあいリビング「下新庄さくら園」、「ひがしまち街角広場」を対象として、実態調査と主へのインタビュー調査を行い、これら3つが共に、利用対象者が特定されていない、過ごし方が決められていない、関係性が固定的でないなどの「開かれ」た特徴を持つ、従来にない公共的な場となっていることを明らかにしている。
- (4) 調査したコミュニティ・カフェの運営は極めて柔軟で、ある出来事へのその都度の対応の積み重ねによって変化していること、更に、さくら園開設の目標であった「ふれあい」の中身（実態）が「活動への参加」から「多様な社会的接触」へ変化していった例のように、施設・場所の目的の中身が予め確定しているのではなく、運営を通して事後的に形成されていることを明らかにしている。
- (5) 各々の主は、以上のような場の「開かれ」た性格や、柔軟な運営方針について意識的・自覚的であり、また媒介役としての利用者の多様な社会的接触のサポートや、その為のか場のしつらえや管理など、場の立ち上げから日々の実践まで決定的な役割を果たしていることを明らかにしている。

以上のように、本論文は、今後の地域における新たなタイプのパブリックな場を構想・デザイン・運営する上で、貴重な知見を提出しており、建築計画・都市計画の発展に寄与するところ大である。よって本論文を博士論文として価値あるものと認める。